

Title	増殖戦略とオペレーター
Sub Title	Proliferation strategy and operators
Author	横路, 佳幸(Yokoro, Yoshiyuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2019
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.143 (2019. 3) ,p.31- 60
Abstract	
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000143-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

増殖戦略とオペレーター

——横 路 佳 幸*——

Proliferation Strategy and Operators

Yoshiyuki Yokoro

はじめに

いわゆる増殖戦略 (proliferation strategy) とは、特定の種類の文あるいはそれが持つ命題の真理値の変動を適切に捉えるために導入・総称される一般的な意味論的枠組みのことである。増殖戦略によると、問題の文が真理値を変動させる事態は、それを値踏みする状況へ何らかの種類のパラメーターを新たに措定することによって説明できる。たとえば、「雨が降っている」という単純な発話文は、昨日の時点では（雨が降っていたがゆえに）真であるとしても、今日の時点では（もう雨は止んだがゆえに）偽である。この時制的真理の変動をあるタイプの増殖戦略——時制主義 (temporalism) として現代では広く知られる立場——は次のように説明する。すなわち、当の文の真理値を値踏みする状況に措定される時点パラメーターの値が昨日であるか今日であるかに応じて当の文の真理値は変動する、と。従来、増殖戦略の実践事例は主として、時点パラメーターが措定されるこうした時制文が中心であった。しかし近年になって、増殖戦略は、多岐にわたる種類の文の真理値変動を説明する一般的枠組みとして、

* 慶應義塾大学

各種のパラメーターの考案とともにその適用範囲を急速に広げつつある。たとえば、味覚や認識様相などに関する表現や文の意味論的振る舞いは、状況内の新たなパラメーターによって説明できる。増殖戦略はいまや、それら一連の意味論を探究し構築するにあたって、十分な考慮・検討に値する意味論的枠組みの一つである。

しかしながら、これまで増殖戦略やその個々の適用事例には、厳しい批判と根強い疑念も提起されてきた。中でも、あらゆるタイプの増殖戦略一般に当てはまる強力な批判の一つは、問題のオペレーターの存在の疑わしさに基づくものである。この批判によれば、措定されるパラメーターの不在を示す最も強力な論拠とは、対応する内包的な文オペレーターの不在である。内包オペレーターは、状況内のパラメーターの値を何らかの仕方で変動させるという意味論的役割を担うものである。だが、もしオペレーターだと考えられた問題の表現が、実際にはオペレーターの役割を果たせないとすれば、それと対応する状況内のパラメーターはそうした表現によるいかなる作用も受けないがゆえに余剰となるか、あるいはその措定は無根拠で不当となるだろう。その結果、増殖戦略一般に備わる致命的な欠陥を示すには、次の指摘を行うだけで十分であるとしばしば考えられてきた。すなわち、措定されたパラメーターに対応するオペレーターが我々の自然言語には存在していない、と。

本稿で私は、増殖戦略に対するこうした批判には根拠がなく、状況内におけるパラメーターの措定は当の言語におけるオペレーターの存在に頼らずとも可能であると論じる。これを示すため、私は以下の流れで論述を進める。まず、増殖戦略一般の理論的特徴を明らかにし、その適用事例を見る（第一節）。続いて、増殖戦略においてパラメーターがいかなる根拠で措定されてきたかを概観し、オペレーターの存在の疑わしさを利用した論駁が増殖戦略にとって問題となりうることを確認する（第二節）。次に、新たなパラメーターの措定の根拠を考察し、そこで私は、あらゆる文脈で

一定の内容を持つが外延は状況に依存する当の表現、すなわち当の非指標的で状況依存的な表現それ自体がパラメーターの措定を根拠づけようと主張する（第三節）。このとき、カプラン的意味論における使用の文脈といわゆるモンスターの関係性へ着目することが、私の主張の正当性を示す大きな助けとなる。さらに、ジョン・マクファーレンによる示唆を参照することで、パラメーターの措定は、問題の表現を非指標的で状況依存的とみなすことでもたらされる理論的恩恵によって根拠づけられると主張する（第四節）。最後に、この主張を具体例に即して例証するため、同一性述語を非指標的で状況依存的な表現とみなすことによる理論的恩恵を簡単に提示する。

第一節 カプランの意味論から増殖戦略へ

増殖戦略一般がいかなる意味論的枠組みであるかを知るには、Kaplan (1989) によって提示されたカプラン的意味論の基本的枠組みを見るのが近道である。この理由は次の点にある。すなわち、現にある増殖戦略の多くは、カプラン的意味論を個々の様々なタイプの事例に適合するように発展させた（または改変した）枠組みだと考えられるからである。また、カプラン的意味論自体も、少なくとも時制については、明確に増殖戦略に属する一つのタイプである。それゆえ、以下でカプラン的意味論と増殖戦略を比較しておくことには十分な意義があるように思われる。

何よりもまず、カプラン的意味論の最も特徴的だと思われる部分、すなわち「意味」の種類と「指標詞」の振る舞いに関する分析を概観しておこう。カプランによると、あらゆる表現の意味は、基本的に二つのレベルに分けることができる。一つはある表現 e の意味特性 (character) と呼ばれ、実質的にそれは e を使用する文脈 c から e の内容 (content) への関数である。これはつまり、ある表現の意味特性が定数関数でない場合、その表現を用いる文脈 c が変動すると、その表現の内容も変動するというこ

とである。そのとき文脈 c は、「私」や「ここ」などの指標詞に応じて、行為者や時点などから成る。他方で、もう一つの意味とは e の内容である。それは、値踏みの状況 (circumstance of evaluation) から外延への関数に相当し、文レベルでは任意の文 S の内容は状況から真理値への関数に相当する。ここで言われる (値踏みの) 状況とは、いわば外延や真理値を値踏みするものであり、意味特性のケースと同様に、ある表現の内容が定数関数でない場合、その表現を値踏みする状況が変動すると、その表現の外延や真理値も変動する。また、「次のことは可能である」や「次のことはかつて成立した」などの様相や時制の内包オペレーターに応じて、状況は少なくとも世界 w と時点 t から成るとされる。したがって、カプランの意味論が備える形式的なプロセスは次のように説明できる。すなわち、表現 e の (非定数的な) 意味特性を介することで、 e の内容は e を用いる文脈 c によって変動し、さらに e の (非定数的な) 内容を介することで、 e の外延は世界 w と時点 t から成る状況によって変動する。

いま指標詞「私」を例にとろう。すると、「私」の二つの意味は次のようになる。すなわち、意味特性は、「文脈 c の発話者あるいは書き手」などのように、文脈 c の行為者 a を入力とするような言語的規約によって定められる関数である一方で、内容は個々の文脈に応じて変動する具体的な発話者である。たとえば、「私はデイヴィッドである」という発話文をいかなる文脈で用いたとしても、その「私」の意味特性それ自体はいわば辞書的で固定的である。他方で、当の発話文における「私」の内容は、それを用いる文脈 c 内の行為者 a の値に応じて変動する。実際、先の発話文における「私」の内容は、ヒュームが発話する場合にはヒュームである一方で、ルイスが発話する場合にはルイスであるという仕方で変動する。一般に、指標詞は、いったんその表現を使用する文脈が決定されると、その内容に相当する指示対象が決定され、状況の値に関係なくその指示対象が外延として固定される。それゆえ、指標詞において内容は定数関数となり、

内容と外延の区別が事実上霧消する。指標詞の「指示対象がいったん〔文脈によって〕決定されると、それはあらゆる可能的状況で固定される」(Kaplan (1989), p. 493) という特徴は、カプランの言葉では「直接指示 (direct reference)」と呼ばれる。つまり、外延や真理値を値踏みするための状況は、指標詞の指示対象を決定するための直接指示的なプロセスに実質ある仕方では関わらない。

その代わりに、指標詞を含まないような表現や文、つまり非指標的な表現や文の意味論的取り扱いにおいて、状況は決定的な役割を担うことになる。特に、ある表現の外延や発話文の真理値を適切に得るには、状況内に世界 w や時点 t などが措定されねばならないとされる。カプランがそのように考えた理由の一つは、世界や時点に中立的な内容を表す発話文の真理値が、世界や時点によって変動するように思われるからである。たとえば、次の文を考えよう。

1. 花子は笑っている。

カプランの意味論では、この文の内容はあらゆる使用の文脈において一定である。1の文は、花子は笑っているという内容を表現し、その内容は世界や時点を特定しておらず、世界・時点中立的である。他方で、1の内容が持つ真理値は、状況内の世界 w と時点 t の値がどのようなものであるかに応じて変動する。これは、大雑把に言えば、1の真理値を値踏みするには、世界と時点を特定し参照せねばならないということである。状況内のパラメーターを変動させるような内包オペレーターが登場しない限り、状況のパラメーターの値は通常、当の表現や文を用いる文脈によって決定される。それゆえ、1は、それを発話した世界と時点に照らして真理値を導き出されねばならない。

したがって、カプランの意味論では、1の真理条件は次のようなものとなる。

2. 「花子は笑っている」が文脈 c で真であるのは、 c で決定される状況内の世界 w と時点 t において花子が笑っているときかつそのときに限る。

1 をある日の正午において発話した場合、その時点で実際に花子が笑っているのであれば、1 の内容は真である。しかし、その日の真夜中には花子は笑っていないとすると、その時点で発話される 1 の内容は偽である。この二つの事態の違いを的確に表現する手段が、2 の真理条件である。2 によれば、1 の内容が持つ真理値は、1 を発話する文脈で決定される状況内の時点 t の値によって変動することになる。ただし、このことは 1 の内容それ自体が時制的に変動することを含意するわけではないということには注意する必要がある。というのも、指標詞と異なり、1 の内容はいかなる文脈の影響も受けないからである。言い換えれば、1 は、意味特性が固定された定数関数であるがゆえに、文脈が変動してもその内容は時点中立的である一方で、発話の文脈が変動すると状況内の t の値も変動するがゆえに、その真理値は変動しうる。それゆえ、カプランが状況内に少なくとも時点のパラメーターを措定したのは、時制的な文や表現の内容の一定性（または内容の文脈からの独立性）と、その真理値の時点依存性（または真理値の文脈鋭敏性）を同時に説明するためだと言ってよい。カプランは、1 のような文の振る舞いを、外延や真理値を値踏みする状況をより豊かにすることで説明しようとしたのである。

私が本稿全体で念頭に置く増殖戦略とは、こうした時制に関する説明をその他の表現や文にまで拡張できるように一般化したものである¹。たとえば、次の味覚と認識様相に関する単純な事例を考えよう。

3. 納豆はおいしい。
4. 太郎は帰宅しているかもしれない。

この3と4を先の1と類比的な仕方で見ると、これらの文はあらゆる文脈で一定の内容を表しながらも、文脈ごとにその真理値を変動させることになる。おそらくこれは理にかなった説明だと思われる。というのも、たとえば3は、誰が発話したとしても同じ内容、すなわち納豆がおいしさを持つという内容しか表さない一方で、「納豆は発酵食品である」という叙実的な発話と異なり、当事者の味覚に関する主観的な好ましさを問題としているように見えるからである。花子が3を発話するとき、その真理条件は花子による味覚の基準に対応したものだと思われるが、それを三郎が発話するときにはその発話の真理値は三郎による味覚の基準に応じたものである必要がある。たとえば、納豆好きの花子によって発話された3の表す内容は真であるが、納豆を毛嫌いする三郎が「納豆はおいしくない」と発話するときには3の表す内容は偽である。つまり、3の発話の真理条件を構成するには、そこで問題となる当事者の嗜好に根差した味覚の基準が必要である。4の認識様相の例についても同様に、その真理条件を構成するには、「太郎は帰宅している」と違い、当事者の持つ知識・情報体系などに根差した主観的な認識的状况が必要であるように思われる。

そこで増殖戦略は、3と4の真理値変動を正しく把握するために、状況のうちに新たなパラメーターを措定する。一部の論者にならい、「おいしい」という味覚述語に応じて味覚の基準のパラメーター g を、「かもしれない」という認識様相表現に応じて情報状態のパラメーター h を新たに措定することにしよう (cf. Kölbel (2009); Yalcin (2007))。つまり、3と4の真理値を正しく値踏みするためには、世界や時点にくわえて味覚の基準と情報状態も一緒に参照せねばならず、状況は少なくとも $\langle w, t, g, h \rangle$ という順序四つ組であらねばならない。すると、3と4の真理条件はそれぞれ次のように(単純化して)表現できる。

5. 「納豆はおいしい」が文脈 c と状況 $\langle w, t, g, h \rangle$ で真であるのは次のときか

つ次のときに限る。すなわち、 c で決定される状況、すなわち世界 w と時点 t における味覚の基準 g によると納豆はおいしい。

6. 「太郎は帰宅しているかもしれない」が文脈 c と状況 $\langle w, t, g, h \rangle$ で真であるのは次のときかつ次のときに限る。すなわち、 c で決定されるそれぞれの状況、すなわち世界 w と時点 t における情報状態 h によってある（認識的）世界 w^* が与えられ、 w^* において太郎は帰宅している。

発話当時の花子の味覚の基準によると納豆はおいしいとしよう。このとき、3の内容は5により真である。他方で、発話当時の三郎の味覚の基準によると納豆はおいしくないとすると、3の内容は5により偽となる。このため、納豆嫌いの三郎が花子による3の発話文を否定して、「納豆はおいしくない」と発話するとしても不思議ではない。ただし、こうしたときでも花子と三郎によって使用される「おいしい」という表現の内容は変動していない。言い換えれば、それは指標詞と同じように文脈に応じて「花子にとっておいしい」や「三郎にとっておいしい」という異なる内容を持つわけではない。彼らの中で異なるのは、3の内容の真理値（あるいは「おいしい」の外延）、ひいてはそれを値踏みする状況、特に味覚の基準パラメーター g の値である。同じ事情は、4の認識様相についても当てはまる。どのような情報状態が問題となるかによって4の内容の真理値は変動しうる。たとえば、太郎の靴が玄関にあるのを見た花子が4を発話した場合、そうした花子の情報状態によって、太郎が帰宅しているような（認識的）世界が与えられるため、花子による4の表す内容は真である。他方で、太郎は遊びに出かけたと確信する三郎の情報状態によっては、太郎が帰宅しているような（認識的）世界は与えられない。それゆえ、三郎は「太郎は帰宅しているはずがない」と考え、4の表す内容を偽として退けるはずである。6によれば、両者の内容の真理値の違いは、内容自体の違いではなく、状況内の情報状態パラメーター h の値の違いによって説明

される。

以上が、カプランの意味論に基づいた増殖戦略による、味覚と認識様相に関する文の簡潔な説明である。こうした一連の戦略が、その他の文、たとえば知識や知覚経験、道徳、あいまいさなどに関する文などにも自然に適用可能であることは容易に想像できるだろう。実際、これまで考案されてきたパラメーターは、判断者や観点、認識の基準など多岐にわたり、増殖戦略は幅広い分野で応用されてきた²。もちろん、ここまでの説明に対して一定の疑念や反論を提起することは可能である³。また、増殖戦略は必ずしもカプランの意味論に依拠する必要はないがゆえに、実際のところは——特に状況のパラメーターの値の決定の仕方について——さらに細分化された分類を行う必要がある⁴。しかし、以下では増殖戦略内部の細かな違いは脇に置き、さらに上記のカプランの意味論に基づく増殖戦略の説明を典型的かつ正しいものだと仮定しておこう。そのうえで、我々は増殖戦略一般の議論の続きを急ぐことにしたい。

第二節 オペレーターの不在に基づく反論

どのような事例に応用するのであれ、増殖戦略一般に共通する枠組みとは、特定の種類の文の内容を固定したまま真理値の変動を説明するために、状況のうちに新たなパラメーターを措定することである。とはいえ、ほとんどの論者は世界 w が状況のうちに含まれることを否定しないだろう。このため、増殖戦略に特徴的な「新たな」パラメーターとは、実質的には時点 t や味覚の基準 g 、情報状態 h などである。しかしながら、増殖戦略は、いかなる根拠のもとでこうした新たなパラメーターを措定できているのだろうか。言い換えれば、増殖戦略によれば、状況内のパラメーターは、世界 w だけでなく、必要に応じて増殖させることができるが、ここで言われる「必要に応じて」とはいったいどのような内実を持つのだろうか。こうした問いに適切な答えを与えない限り、増殖戦略に

よるパラメーターの措定は恣意的で無根拠ということになりかねない。以下では、パラメーターの措定の根拠を多くの論者がこれまでどのように考えてきたのかを考察し、それと同時に従来考えられてきた根拠では増殖戦略は大きな困難に直面することを確認する。

手短に言えば、状況内にどのようなパラメーターが含まれるかという問いは通例、どのような種類の内包オペレーターが当の言語に現に存在しているかという問いと相互に関連し合うと考えられてきた。カプランによって示されたいわゆる「オペレーター論証」は、その代表的な議論である。彼によれば、「状況から我々が必要とする情報量は、内容の特定化の程度に結び付くため、それはその言語におけるオペレーターの種類にまで結び付く」(Kaplan (1989), p. 502)。つまり、状況内の特定のパラメーターに作用するオペレーターが当の言語のうちに存在するという考えは、特定の種類の文の内容がそのパラメーターに中立的であるという考えに結び付き、それはさらにそうしたパラメーターが指標内に措定されるという考えに結び付く。特に、時制主義者としてカプランは、時制文の内容と状況内の時点パラメーター、そして時制オペレーターの関係性について次のような示唆を行う。すなわち、もし時制文の内容が時点中立的でない、すなわち特定の時点が組み込まれた時点特定の永久的なものだとすると、時制オペレーターは余剰である。しかし、「いま」や「毎日」などの表現は、伝統的な時制論理に従うと、時点パラメーターの値を特定するか、またはその値域を教えるような時制オペレーターであり、それらは決して余剰なものではない。ゆえに、時制文の内容は時点に中立的であり、それらを値踏みする状況には時点パラメーターが含まれる。したがって、カプランによれば、時点パラメーターの措定は時制オペレーターの存在によって正当化される。

この論証の確からしさを見るため、次の単純な時制文を考えよう。

7. 太郎は寝坊した.

7の文は、差し当たり「次のことはかつて成立していた. すなわち太郎は寝坊する」と言い換えることができるとしよう. このとき、「次のことはかつて成立していた」は過去に関する内包オペレーターであるように見える. このオペレーターは、決して余剰ではなく実質的に存在するものだろう. 7の文の内容それ自体は、特定の具体的な時点が組み込まれたものでも永久的なものでもなく、時点に中立的なものである. その代わりに、当の過去オペレーターは、この文の真理値を値踏みする状況内の時点パラメーター t に作用し、その結果 t の値はこの文の発話時点より前の時点となる. つまり、7の文が真であるのは、発話時点より前の時点において太郎が寝坊するときかつそのときのみである. たとえば、ある日の正午に花子がこの発話を行った場合、その発話文の真理値を値踏みするには、その日の正午よりも前の時点が（内容ではなく）状況内に必要である. 一見したところ、こうした過去オペレーターが時点パラメーター t の値を決定するという説明は正しいものであるように思われる. ゆえに、時制オペレーターの存在を認めるとき、7の内容の時点中立性と時制的な真理値変動を同時に説明するためには、そのオペレーターによる作用を受けるパラメーターとして状況内に時点 t を措定せねばならない.

この時制の例からわかるように、対応するオペレーターが余剰でない仕方では存在することは、状況内への問題のパラメーターの措定を強く動機づけると考えられる. 逆に述べれば、もし問題のオペレーターが余剰であるか、あるいは特定の表現が（オペレーターに見えたが）実際にはオペレーターでなかったとすると、対応するパラメーターの措定もまた余剰であるがゆえに正当化されず、その措定は妨げられるのかもしれない. 実際、ジェイソン・スタンリーやジェフリー・キングをはじめとする論者は、時制などに関するオペレーターの不在を根拠に、（世界 w を除く）増殖戦略

を非難する (cf. Stanley (2007); King (2003)). 彼らによれば, たとえば時制文には当の統語論的な論理形式において隠された時点の変項が量化されており, その変項の値は文脈によって影響される. このため, 先の7は次のような量化文を表すことになる.

8. 文脈 c で決定される次のような時点 t が存在する. すなわち, t は「太郎は寝坊した」を発話した時点 t^* よりも過去であり, かつ t において太郎は寝坊する.

たとえば, 花子が2018年10月1日の正午に7を発話する場合, 8によれば, その発話の内容は, 「2018年10月1日の朝の時点で太郎は寝坊した」というものになるだろう. ここで重要なのは, 2018年10月1日の朝の時点が, 7の発話文の内容に直接組み込まれているという点である. 文脈によって時点特定の内容が与えられる限り, 状況内の時点パラメーター t の値を決定するような過去オペレーターは, まったく必要ではなくむしろ余剰である. したがって, 時点パラメーターを措定する必要はもはやなく, それゆえに真理値を値踏みするための状況は世界 w だけから成るよりシンプルなものでもよい, ということになる⁵.

8のような量化分析を与える論者の一人であるスタンリーは, 時制オペレーターに頼る分析が「扱いにくくアドホック」(Stanley (2007), p. 245, fn. 6) だと論じ, もう一人の論者であるキングは8による分析の方がオペレーターによるものよりも「シンプルかつエレガント」(King (2003), p. 223) であると論じる. 彼らの批判をより一般的なものにすると, 次のようになるだろう. すなわち, 特定の種類の文は, それが仮に何らかのパラメーター x の値によって真理値を変動させるように見えても, 実際には(文脈鋭敏的な変項を含んだ)量化文に還元され, 個々の発話文は x の値を直接に含む内容を持つと考える方が扱いやすく理論としてエレガ

ントである。こうしたとき、(様相を除く)あらゆるオペレーターは余剰である、あるいはオペレーターだと思われた表現は実際にはオペレーターではない。それゆえ、オペレーターによって作用されると思われた状況内の(世界 w を除く)新たなパラメーターの存在や措定もまた疑問視されることが帰結する。スタンリーとキングによるこうした主張は、対応する内包オペレーターの不在を論じることによって、あるいはオペレーターが不要となる根拠を示すことによって、パラメーターの増殖を厳しく制限するよう要求するものである。

以上より、本節の冒頭で提起された疑念に対する最も一般的かつ広く受け入れられた応答、そしてその問題は明白である。その応答によれば、状況内のパラメーターの措定は、対応するオペレーターが余剰でない仕方で存在することによって正当化される。つまり、増殖戦略がパラメーターを新たに措定できる根拠とは、問題のパラメーターの値を特定・変動させるようなオペレーターが当の言語で存在することだと言える。しかし、そのようなオペレーターは、アドホックで複雑な説明しか与えないがゆえに存在しないと考える方がよいかもしれない⁶。その顕著な例は、7で見たような時制文である——実際、増殖戦略の一つである時制主義は現代においてもはや主流とは言いがたい立場である。

同様の点は、先の味覚や認識様相に関する文などでも生じるだろう。たとえば、「花子にしてみれば、納豆はおいしい」という文に含まれる「花子にしてみれば (for)」という表現が内包的な文オペレーターの役割を果たすとすれば、状況内に含まれる味覚の基準 g の値は納豆好きの花子の味覚の基準に特定されるように見える (cf. Kölbel (2009); Lasersohn (2016); Stephenson (2007))。しかし、様々な使用例に照らしてみると「花子にしてみれば」は、「オペレーターという意味論的機能ではなく、それ以外の「たとえば「おいしい」の参照クラスを部分的に特定するという」特定の機能を担う」(Stanley (2005), p. 143, fn. 8) もので、内包オ

ペレーターとみなす根拠に欠けるかもしれない (cf. Schaffer (2011); Snyder (2013)). このとき、そのオペレーターの作用を受けると思われた状況内の味覚の基準パラメーターの措定は正当化されず、その代わりにいまの文の内容は (時制の量化分析にならうならば) 特定された味覚の基準を直接に含むものでありうる。よって、これを一般化すると、オペレーターの存在に疑義が呈される限り、パラメーターを措定するための根拠にも疑義が呈され、ひいては増殖戦略それ自体に対しても疑義が呈されることになる。それゆえ、オペレーターの不在に基づく批判に何らかの応答を与えることは、増殖戦略を支持する者にとって喫緊の課題なのである。

第三節 非指標的で状況依存的な表現とカプラン的意味論の再訪

しかし、私の考えでは、オペレーターの不在に基づく批判に対して、増殖戦略は十分に応答可能である。さらに言えば、対応するオペレーターなしでも、状況内の新たなパラメーターを措定することは動機づけられると私は考える。もちろん、味覚と認識様相に関する5と6が正しいとすれば、増殖戦略の支持者は前節の「花子にしてみれば」を最終的にオペレーターとみなすのが自然である——少なくともそうみなすことは適切な意味論を与えるだろう。だが問題は、そうしたオペレーターの有無が新たなパラメーターの措定の可否を左右するかどうかである。以下ではこの問いに否定的に応答するためのロードマップを素描することにしよう。

詳しい議論に入る前に、問題なく認められる前提から議論を始めたい。その前提とは次である。

9. 仮に状況内のパラメーター x に作用するオペレーター X が余剰でない仕方
で存在するならば、 X の存在を根拠に x を状況内に措定することができる。

9によれば、時制や味覚の基準、認識様相に関するオペレーターが余剰で

ない仕方では存在するとき、そのことを理由に状況にはたとえば時点 t や味覚の基準 g 、情報状態 h が指定されることになる。これは賛否を巻き起こす主張ではないだろう。というのも、あるオペレーターが実質ある仕方では存在するならば、内包オペレーターが一般に状況内のあるパラメーターに作用するものである限り、そこで作用されるパラメーターは必ず指定されねばならないように思われるからである。あるオペレーターが余剰でない仕方では存在しているにもかかわらず、対応するパラメーターが状況内に指定されないのだとしたら、そもそも「オペレーターが余剰でない仕方では存在している」ことにならないはずである。よって、いまの議論において9が論争の対象になることはないだろう。

他方で、スタンリーやキングによれば、ほとんどの内包オペレーターはその存在が疑われねばならないのだった。先に述べたように、時制などに関するオペレーターを想定するよりも、それらに取って代わる隠された変項を伴う量化文を想定する方がより大きな説明力を持つからである。彼らはその結果、問題のオペレーターの不在から、対応するパラメーターの不在を導く。たとえば、スタンリーは時制文について、「時制はオペレーターでないという [近年の] 新たな合意によって、時制主義を支持するカプランの議論は崩れ去る」(Stanley (2005), p. 148) と述べ、またキングはより一般的に、状況が「特定の特徴を持たねばならないかどうかは、その特徴を変動させるオペレーターが当の言語において存在するかどうか依存する」(King (2003), p. 202) と述べる。よって、彼らは事実上支持していると言ってよいはずである。

10. 仮に状況内のパラメーター x を変動させるオペレーター X が実質的な仕方では存在しないならば、 X の不在のゆえに x は状況内に指定されえない。

9と対照的に、10によれば、パラメーターの指定が妨げられる根拠は、そ

れに対応するオペレーターの不在である。増殖戦略に当てはめると、このことは次を意味する。すなわち、状況内に時点 t や味覚の基準 g 、情報状態 h などのパラメーターに作用するオペレーターが存在しないとき、つまり「いま」や「花子にしてみれば」などの一連の表現が（扱いにくく説明上エレガントでないがゆえに）内包オペレーターとしての機能を果たさないとき、そのことを根拠としてそれらパラメーターの指定は妨げられる、ということである。

たしかに、10 を認めるとき増殖戦略は大きな苦境に立たされるかもしれない。しかし、なぜ我々は10 を支持せねばならないのだろうか。言い換えれば、10 の代わりに次の11 をなぜ支持してはならないのだろうか。

11. 仮に状況内のパラメーター x を変動させるオペレーター X が実質的な仕方では存在しないとしても、 X の存在以外の根拠で x を状況内に指定することができる。

私には10 を擁護する理由が端的に不明瞭である。一見して明らかであるように、問題のオペレーターが存在しない場合について述べる11は、先に前提と考えられた9と両立しうる。問題のオペレーターが実質ある仕方では存在しない場合に、それに対応するパラメーターの指定の根拠をどう考えればよいのかについて9は何も述べないからである。前節で見たオペレーター論証も本来は、オペレーターの存在からパラメーターの指定を導出する9のみを利用した論証である。にもかかわらず、スタンリーやキングをはじめとする多くの論者が、10に疑問を投げかけることなく受け入れ、11が成立する可能性を検討してこなかったように見える。もちろん、オペレーターの存在への疑わしさは、9を利用したパラメーターの指定がうまく正当化されないことを意味する。だが、そのことは、9ではない指定の根拠が新たに必要とされるという可能性を排除しない。少なくとも

も9と10を同等に扱う理由はどこにもない。よって、9を支持したとしても、10ではなく11を新たに提示する余地は依然として残っているはずである。

では、11における「 X の存在以外の根拠」とはどのようなものだろうか。私の見方では、あるパラメーター x を状況内に措定する一つの根拠として認められうるのは、 x に対応し、**あらゆる文脈で一定の内容を持つが外延は状況に依存するような表現の存在**である。簡便のため、こうした表現を非指標的で状況依存的な (non-indexical and circumstance-dependent) 表現、略して NICD 表現と呼ぶことにしよう。すると、先の11は次のように敷衍することができる。

12. 仮に状況内のパラメーター x を変動させるオペレーター X が実質的な仕方では存在しないとしても、 x に対応する NICD 表現が存在するならば、 x に対応する NICD 表現の存在を根拠に x を状況内に措定することができる。

増殖戦略は、状況内に時点 t や味覚の基準 g 、情報状態 h などのパラメーターを「必要に応じて」措定する。12によると、ここで言われる「必要」とは、それら一連のパラメーターに対応する時制表現や「おいしい」、「かもしれない」などの NICD 表現が存在するということを意味する。それら NICD 表現は、内容の一定性（または内容の文脈からの独立性）と、その真理値の状況依存性（または真理値の文脈鋭敏性）の両立を可能にする。このため、12が述べるのは、仮に対応するオペレーターが存在しない、またはそれがエレガントな説明力をまったく持たないとしても、内容の一定性と真理値の状況依存性の二つを保持する表現の存在を根拠として、対応するパラメーターを措定してよいということである。したがって、先の穏健な9といまの12を組み合わせて述べると次のようになる。すなわち、対応するオペレーターが実質的な仕方では存在する場合には、パラ

メーターの措定の根拠となるのはそうしたオペレーターの存在であるが、仮にオペレーターが実質的な仕方では存在しない、または少なくともアドホックな説明力しか持たないとしても、増殖戦略によるパラメーターの措定は NICD 表現の存在を根拠として可能となる、ということである⁷。

しかし、12 に対して次のような疑念が提起されるかもしれない。すなわち、「NICD 表現」は本当にパラメーターの措定の根拠となりうるだろうか。ある表現が NICD 表現であるためには、その外延は状況内のパラメーターへの依存性を持たねばならないとすると、特定の NICD 表現が成立するにはあらかじめ問題のパラメーターが措定されていなければならないことになる。このとき、問題のパラメーターが措定されているからこそその表現が NICD 表現となるのであるから、12 は循環しているように見える。ゆえに、12 は増殖戦略にとっていかなる助けにもならないのではないか。

こうした循環に関する疑念を完全に解消するには次節まで待たねばならない。その代わりにここでは、12 がまったく正当性を欠く主張をしているわけではないことに注意を促しておこう。そのためには、第一節の前半で簡単に見たカプラン的意味論における文脈内のパラメーターの措定の根拠との比較が大きな助けとなる。カプランによれば、文脈にどのようなパラメーターが組み込まれるかは、大まかに言えば、どのような文脈依存的な表現、すなわち直接指示的な指標詞が存在するかと密接な関係にあるとされる。カプランの言葉を借りれば、「文脈のアスペクトは、存在する指標詞に関するあらゆる要素を含んでいなければならない」(Kaplan (1989), p. 511, fn. 35)。たとえば、「文脈の行為者は、指標詞「私」を解釈する際に必要とされる」(ibid.) といったように、文脈内に行為者や時点、場所、世界などのパラメーターが要請されるのは、「私」や「いま」、「ここ」、「現実」などの指標詞の文脈鋭敏的な内容あるいは直接指示性を引き出すために必要だからである。逆に言えば、文脈内のパラメーターの措定の根拠は、それらの値を変動させる非内包的なオペレーターが存在すること

ではない。むしろ、カプランはそうした文脈内のパラメーターの値を変動させる特殊なオペレーターをモンスター (monster) と呼び、その存在を少なくとも英語においては積極的に拒否する。彼の拒否の理由はひとまず脇に置いておこう⁸。ここでは、カプランの意味論における文脈内のパラメーターと指標詞、モンスターという三者の次のような関係性を確認するだけで十分である。すなわち、文脈 c を構成する種々のパラメーターの値を変動させるモンスターが存在しないとしても、「私」や「いま」、「ここ」などの表現が文脈依存性・直接指示性を持つ指標詞であるがゆえに、行為者 a や時点 t 、場所 l などは文脈内のパラメーターとして措定可能なのである。

したがって、カプランの意味論においては、実質的に次の成立が認められているように思われる。

13. 文脈内のパラメーター y を変動させるオペレーター Y が存在しないとしても、 y に対応する直接指示的な表現が存在するならば（あるいは y に対応する表現が直接指示性を持つならば）、 y に対応する直接指示的な表現を根拠に y を文脈内に措定することができる。

カプランの意味論において、文脈内に特定のパラメーターを措定することは、それを変動させる特殊なオペレーターが存在するかどうかという問題からまったく独立である。たとえば、行為者パラメーター a が文脈内に組み込まれるのは、発話文脈以外の行為者を指示するように「私」の指示対象を変動させる特殊なオペレーターが存在するからではなく、指示対象が発話文脈の行為者を指示するという意味において、「私」が文脈依存的で直接指示的だからである。他にもカプランは、ありうる改良として、文脈内に聞き手パラメーターが追加されるという可能性をほのめかす (cf. Kaplan (1989), p. 552)。こうした追加の可能性を陰で支えるものが、「あ

なた」などの二人称的な表現の直接指示性であって、文脈内の聞き手を変動させる特殊なオペレーターの存在でないのは明白である。

12は、こうしたカプラン的意味論における13と類比的な構造を持っている。時制表現や「おいしい」、「かもしれない」などの表現が非指標的である一方で特定の状況に依存的な外延を持つ限り、仮に状況内の時点 t や味覚の基準 g 、情報状態 h などの値を変動させる内包オペレーターが存在しないとしても、それらパラメーターの措定は決して不当ではない。少なくともその措定は、モンスターの存在を否定するカプラン的意味論において、文脈内に行為者などのパラメーターが措定されるのがまったく不当ではないのと同程度に不当ではないだろう。13で示されるように、カプラン的意味論において文脈内のパラメーターの措定は、指標詞などの直接指示的な表現の存在によって動機づけられる。私が主張したいのは、13に従うカプラン的意味論が一定の支持と理解を獲得しうるのであれば、これと平行な構造を持つ12もまた、まったく突飛というわけでもアドホックというわけでもないということである⁹。

とはいえ、10を支持する者は次のような疑念を提起するかもしれない。すなわち、12のように、状況内のパラメーターの措定が、対応するオペレーターの有無から独立に、対応するNICD表現の存在によって動機づけられるとしても、ある表現をNICD表現とみなす根拠はどこにあるのだろうか。その根拠をオペレーターに頼らずに提示しない限り、12はオペレーターの不在に基づく前節の問題を解決したことになる。というのも、もしある表現がNICD表現となることが、それと対応するオペレーターの存在によって決定されるのだとすれば、オペレーターなしのNICD表現の存在は最初からありえず、結果として10を排除できていないからである。つまり、増殖戦略が12を支持するには、NICD表現は結局のところオペレーターの存在をいかなる場合でも要請してしまうのではないか、という疑念を払拭せねばならないのである。

第四節 マクファーレンの示唆と同一性述語への応用

前節で示されたように、12は、疑いの余地がない9と並んで、増殖戦略が新たなパラメーターを措定するための根拠を教えるものである。この12を前節の二つの疑念から救うため、つまり12を10から独立に正当化し、さらに12が循環しているわけではないと示すため、私が導きとするのはマクファーレンの示唆である。彼は次のように述べる。

優れた理由がなければ、たしかに我々は値踏みの状況のパラメーターを措定すべきではないが、そうした優れた理由でありうるものがなせ、そうしたパラメーターを変動させるオペレーターだけであると考えねばならないのだろうか。(MacFarlane (2009), p. 245)

マクファーレンによれば、オペレーターの存在は必ずしも状況内のパラメーターの措定を動機づける唯一のものではない。たしかに、対応するオペレーターが存在するのであれば、9にある通り、状況内には問題のパラメーターが措定されるはずである。しかし、味覚の基準を変動させる「オペレーターの候補となるようなもっともらしいものが存在しないと示すだけでは、味覚[の基準]を状況の座標から排除するのに十分ではない」(MacFarlane (2014), p. 84)。つまり、対応するオペレーターの存在がパラメーターの措定の唯一の根拠とは限らず、オペレーターの存在以外にもパラメーターの措定を許す根拠があってもよい。では、その根拠とは何だろうか。

この問いにマクファーレンは次のように応答する。すなわち、増殖戦略が持つ「いくつかの利点それ自体が、どうしてパラメーターを措定する優れた意味論的理由とならないのだろうか」(MacFarlane (2009), p. 245)。マクファーレンによると、新たなパラメーターが状況内に措定されることは、そうした措定を行う増殖戦略に理論的恩恵の存在によって動機づけられてよい。これを12の考えに引き付けて発展させれば、次のような考え

が導かれる。すなわち、ある表現を NICD 表現だとみなす際に決定的な役割を担うのは、それと対応するオペレーターの存在ではなく、**NICD 表現だとみなすことによる理論的恩恵や利点**である。したがって、ある表現を内容の一定性と、その外延の状況依存性を持つと想定することに何らかの理論的恩恵と利点があるならば、その表現は NICD 表現だとみなしてよいと考えられ、そのことを根拠としてその表現と対応するパラメーターが状況内に措定されるのである。

私は、マクファーレンの示唆を 12 に組み込むことで発展させた、このいくぶんプラグマティックな議論を支持する。言い換えれば、私は次のように主張する。すなわち、時制表現や「おいしい」、「かもしれない」などの表現が、非指標的である一方で特定の状況に依存的な外延を持つような NICD 表現であると想定することに理論的恩恵がある限り、それら表現に対応する時点 t や味覚の基準 g 、情報状 h などのパラメーターが措定されることが動機づけられる、と。したがって、私は 12 をさらに敷衍した次の 14 を提示する。

14. ある表現 e について、仮に e に対応する状況内のパラメーター x を変動させるオペレーター X が実質的な仕方では存在しないとしても、理論的恩恵のゆえに e が NICD 表現であるならば、その NICD 表現の存在を根拠に x を状況内に措定することができる。

もし 14 が正しいとすれば、12 に対して前節で提起された二つの疑念は問題とならないことが帰結する。第一に、14 によれば、ある表現を NICD 表現とするためにオペレーターの存在はまったく要請されていない。その代わりに、ある表現が NICD 表現となるために必要なのは、そうみなすことの利点、すなわち当の表現の内容が文脈に依存せず一定であることと、当の表現の外延が状況内の特定のパラメーターの値に依拠しているこ

との二つを同時に説明できるという理論的恩恵である。それゆえ、ある表現を NICD 表現とみなす根拠はオペレーターの存在に頼らずに提示可能である。第二に、14 によれば、パラメーターの措定の根拠として NICD 表現の存在を持ち出すことは循環ではない。特定の表現が NICD 表現であるかどうかは、そうみなすことに理論的恩恵があるかどうかによって左右されるのであって、問題のパラメーターがすでに措定されているかどうかによって左右されるのではない。もちろん、マクファーレンのように、特定のパラメーターの措定の根拠として、NICD 表現の存在に頼らずに、直接にその措定による理論的恩恵を想定してもよい。その場合でも 14 と事情はさほど変わらない。状況内への特定のパラメーターの措定による最大の恩恵は、やはり問題の表現の内容が一定的で、かつ当の表現の外延がそのパラメーターに依存することの二つを同時に説明できるということにあり、マクファーレンの考えにおいても、その恩恵は問題の表現が NICD 表現であることを含意するからである。いずれにしても、14 は循環した説明というわけではない。

では、14 で言われる「理論的恩恵」とはつまるところ、どのようなものだろうか。手短かに述べれば、非指標性と文脈鋭敏性の両立可能性の維持こそが増殖戦略の最大の特徴であるのは明らかであるが、そうした両立が実際に「恩恵」たりうるかどうかは、その戦略が適用される個々のケースに応じて多様であろう¹⁰。だが、最後に一つの事例を取り上げて 14 を具体的に例証しておくことは無駄ではあるまい。そこで、たとえば「同一である」という述語、すなわち同一性述語を例にとろう。いまこの述語を仮に NICD 表現とみなしたのだとすると、増殖戦略に基づく同一性述語の意味論は次の二つの見解の維持を可能にする。

15. 同一性述語の外延としての対象の順序対 $\langle d_1, d_2 \rangle$ は、状況内に措定される何らかの新たなパラメーターに依存する。

16. 同一性述語の内容としての同一性関係は、あらゆる文脈で一定であり、(通常考えられている通り) 絶対的な二項関係である。

紙幅の都合上詳しく検討することはできないが、同一性の形而上学および同一性述語の意味論に関する様々な議論に鑑みると、15と16を支持する意味論は大きな理論的恩恵をもたらすように思われる。

第一に、Yokoro (2016) で示唆された意味論は、同一性述語の外延を値踏みする状況のうちに、パラメーターとして新たに数え上げの基準または同一性の基準を措定するよう要請する。これは、同論文で指摘したように、いわゆる緩い意味での同一性と厳密な意味での同一性の区別を適切に説明する際に大きな利点となると同時に、私が妥当だと考える同一性についての特定の理論、すなわち構成説 (constitution view) を含意するような**同一性の特殊な絶対説**の意味論的な解釈としてふさわしいものである (cf. 横路 (2018a); 横路 (2018b))。それゆえ、これら恩恵を享受するには、15を積極的に認める必要がある。

第二に、横路 (2016) で示したように、同一性の特殊な絶対説は、その他の同一性理論、特に相対的同一性説と対置される理論である。興味深いことに、相対的同一性説による意味論の自然な解釈とは、横路 (2018c) で論じたように、第二節で見たスタンリーとキングによる量化分析を同一性述語に応用したものである。言い換えれば、相対的同一性説は、文脈鋭敏な変項の措定を同一性述語の論理形式に要求し、同一性関係を三項関係とみなす。しかし、同論文で指摘したように、相対的同一性説とその意味論は16を否定することになるがゆえに、同一性に特有の深刻な問題を抱え、これは16に否定的なあらゆる理論に応用可能である。この点において、増殖戦略に基づく同一性述語の意味論が(同一性の特殊な絶対説と高い親和性を維持させながら) 16を維持することには大きな理論的恩恵があると言える。したがって、同一性述語をNICD表現とみなすと

き、15と16双方から同一性に関する複数かつ独立の理論的恩恵がもたらされる。以上より、14を援用すると次が帰結する。すなわち、同一性述語は実際に NICD 表現であり、状況には数え上げの基準または同一性の基準が——それを変動させるオペレーターが仮に存在しないとしても——新たなパラメーターとして措定される。

以上から、オペレーターの不在に基づく批判に対し、増殖戦略は14を新たに提示することで適切に応答することができると言える。14は、内包オペレーターが実質的な仕方では存在しないケースについて述べるテーゼであり、オペレーター論証で問題なく利用される9と両立する。また、14あるいは12は、広く受け入れられたカプラン的意味論の13と少なくとも部分的には類比的な構造を持つという点で、不自然な主張というわけでもアドホックな主張というわけでもない。さらに、増殖戦略によるパラメーターの措定は、ある表現を NICD 表現とみなすことの理論的恩恵を根拠とすることができるがゆえに、恣意的でも無根拠というわけでもない。そのことは、同一性述語を引き合いに出して例証することができる。したがって、10ではなく14を支持する余地が十分にあるために、増殖戦略一般はオペレーターの不在に基づく論駁に必ずしも屈しないと私は結論づける。

もちろん、言語学上の近年の知見に基づけば、増殖戦略によるパラメーターの増殖は、スタンリーが述べたように「時代の流れに逆行」(Stanley (2005), p. 152) したのかもしれない。私がかこれに反対することはない。その代わりに私が示したのは次のことである。すなわち、その逆向きの道は決して閉ざされたものではなく、14はその道へ踏み出すことを確かに勇気づけるものだということである¹¹。

注

¹ この「増殖」という語は、Cappelen and Hawthorne (2009) による(ただし、

彼らは増殖戦略に批判的である)。

- ² それぞれのタイプの増殖戦略の事例を挙げるとすれば、次の通りである。すなわち、時制文については Kaplan (1989); Richard (2004); Brogaard (2012), 個人の味覚に関する文については Lasersohn (2016); MacFarlane (2014); Stephenson (2007), 認識様相文については Egan, Hawthorne, and Weatherson (2005); Stalnaker (2014); Yalcin (2011), 知識文については Brogaard (2008); MacFarlane (2014), 知覚経験文については Brogaard (2018); Recanati (2007), 道徳文については Brogaard (2008); Gibbard (1990); 横路 (2017) を見よ。もちろん、あるタイプの (たとえば時制についての) 増殖戦略を支持する者は、その他のタイプの (たとえば味覚についての) 増殖戦略を支持する必要はない。「増殖戦略」というラベルは、状況内へのパラメーターの措定の試みを総称したものにすぎないということは忘れてはならない。
- ³ たとえば、味覚や認識様相に関する文はそもそも真理値を持つのかという疑念をはじめ、味覚の基準や情報状態といった主観的なものをパラメーター化してよいのかという疑念や、条件文などのより複雑な文や二重の認識様相文などはどう考えればよいのかという疑念などが提起されるかもしれない。だが、紙幅の都合上本稿ではこれらの疑念を取り扱うことはできない。
- ⁴ 本稿で私が描写したのは、状況内のパラメーターの値が使用の文脈によって決定されるとみなすようなカプランの意味論に依拠した増殖戦略であるが、これは増殖戦略にとって唯一の選択肢ではない。たとえば、パラメーターの値が、使用の文脈以外にも、発話者の意図と語用論的に関係するいわゆる広い文脈 (wide context) による影響を受けると考えることも可能である (cf. Brogaard (2008); Recanati (2018)). また、使用の文脈の代わりに、発話者以外の評価者による評価の文脈 (context of assessment) によって問題のパラメーターの値が決定される (cf. Lasersohn (2016); MacFarlane (2014)), または発話者自身の心的状態の表出 (expression of mental states) によって (つまりいわゆる表出主義的な仕方) で値が決定されると考えることもできる (cf. Gibbard (1990); Yalcin (2011)). しかし、増殖戦略という大きな枠組みから見れば、それらの違いはパラメーターの措定の根拠を論じる本稿には影響しない。
- ⁵ もちろん、様相オペレーターも余剰ということであれば、状況には世界すら必要ではない。実際に Cappelen and Hawthorne (2009) は、真理値の導出過程から状況のパラメーターすべてを取り除くことを提案している (類似した提案は Glanzberg (2011) でも行われている)。ただし、彼らの解決策は、ス

タンリーやキングのものとは異なる。

- ⁶ 時制主義が抱える最も厄介な問題の一つは、時制主義は時制表現（たとえば過去時制的表現）と時間に関する指標的な副詞（たとえば「昨日」）の二つをともに時制オペレーターとして取り扱うがゆえに、それら両者が同時に登場する複合的な文（たとえば「昨日、太郎は走った」）の真理値の変動をうまく説明できないということである（代わりに、8のような量化分析はそうした真理値変動をうまく説明することができる）。これはたしかに時制オペレーターが「扱いにくい」事例の一つである。とはいえ、このことは「扱うことができない」ことを意味しない。これまで時制論理や時制主義を重んじる論者が指摘してきた通り、この問題は、後者の時間に関する副詞を、前者の時制オペレーターによるパラメーターの変動を制限するような修飾表現だと解釈することで一応は解決可能である（cf. Blackburn (1994); Brogaard (2012), pp. 86ff.）。時点以外のケース（たとえば認識様相述語と信念的述語が同時に登場する「雨が降っているかもしれないと花子は思う」）でも類似の問題と解決策は想定可能である（cf. Stephenson (2007)）。それゆえ、こうした議論を一例として、時制オペレーターやその他オペレーターの存在を認める立場の是非は、説明上の「アドホックさ」や「エレガントさ」をどのように捉えるかという問題とある意味で表裏一体であるかもしれない。この点については、注7も見よ。
- ⁷ 本稿で私は、問題のオペレーターが本当に我々の言語に存在するかどうかについて中立的な態度を保持したい。その理由は、仮にあらゆるオペレーターがアドホックな説明しか与えず、問題の表現や文にエレガントな意味論を構築しえないのだとしても、そのことだけでオペレーターの「不在」まで論証できるのか私には疑問に映るからである。また、状況内へのパラメーターの指定が当のオペレーターの存在を立証するという可能性が必ずしも妨げられないのだとすれば、パラメーターとオペレーターの関係性をめぐる事態はさらに複雑である。それゆえ、問題となるオペレーターの有無について決定的な結論を下すのは決して容易なことではなく、少なくともパラメーターの指定の根拠を問うような文脈では中立的な態度を保持するのが賢明であると私は考える。
- ⁸ 簡潔に言えば、カプランがモンスターを拒否した理由は、Rabern (2013) が正しく指摘するように、それを認めると指標詞の直接指示性が脅かされるからにわえて、内容に課せられる合成性の原則が破られてしまうからである。逆に言えば、カプランの主張に反対して、指標詞の直接指示性を拒絶する、あるいは意味の合成性を内容以外のレベルで保持できると主張する場合には、

モンスターの存在が認められてもおかしくはない。

- ⁹ もちろん、カプラン的意味論の支持者は、13 を支持する一方で 12 を拒否してよい（カプラン自身もおそらく 12 を受け入れないだろう）。12 と 13 の類比性はあくまで構造的な類似性に基づくものであり、両者は独立に論じられるものである。
- ¹⁰ しばしば指摘されるように、あらゆる増殖戦略に共通の理論的恩恵だと考えられるものの一つは、いわゆる「瑕疵のない不一致 (faultless disagreement)」という事態を説明できることである (cf. Kölbel (2009))。しかし、これが本当に理論的恩恵となるかどうかは、非指標性と文脈鋭敏性の両立がそうであるように、本来は個々のケースごとに議論せねばならない問題である。
- ¹¹ 本稿の草稿は、2016 年度応用哲学会第 8 回研究大会ワークショップ「モンスターをめぐって：カプラン以降の意味論」（オーガナイザ：横路佳幸）において行った発表に基づいている。その場およびその他の機会に有益なコメント・助言をくださった方々、特に天本貴之氏、柏端達也教授、木田翔一氏、小林靖典氏、仲宗根勝仁氏、高谷遼平氏、中崎紘登氏にこの場を借りてお礼申し上げたい。なお、本稿は慶應義塾大学博士課程学生研究支援プログラムの助成を受けたものである。

参考文献

- Blackburn, P. (1994), "Tense, Temporal Reference and Tense Logic", *Journal of Semantics* 11, 83-101.
- Brogaard, B. (2008a), "In Defense of a Perspectival Semantics for 'Know'", *Australasian Journal of Philosophy* 86, 439-59.
- (2008b), "Moral Contextualism and Moral Relativism", *Philosophical Quarterly* 58, 385-409.
- (2012), *Transient Truths: An Essay in the Metaphysics of Propositions*, New York: Oxford University Press.
- (2018), *Seeing and Saying: The Language of Perception and the Representational View of Experience*, Oxford: Oxford University Press.
- Cappelen, H. and Hawthorne, J. (2009), *Relativism and Monadic Truth*, New York: Oxford University Press.
- Egan, A., Hawthorne, J. and Weatherson, B. (2005), "Epistemic Modals in Context", in G. Preyer and G. Peter (eds.), *Contextualism in Philosophy: Knowledge, Meaning, and Truth*, New York: Oxford University Press.

- Egan, A. and Weatherson, B. (eds.) (2011), *Epistemic Modality*, New York: Oxford University Press.
- Gibbard, A. (1990), *Wise Choices, Apt Feelings: A Theory of Normative Judgment*, Cambridge (MA): Harvard University Press.
- Glanzberg, M. (2011), "More on Operators and Tense", *Analysis* 71, 112-23.
- Kaplan, D. (1989), "Demonstratives", in J. Almog, J. Perry, and H. Wettstein (eds.), *Themes from Kaplan*, Oxford: Oxford University Press.
- King, J. C. (2003), "Tense, Modality, and Semantic Values", *Philosophical Perspectives* 17, 195-245.
- Kölbel, M. (2009), "The Evidence for Relativism", *Synthese* 166, 375-95.
- Lasersohn, P. (2016), *Subjectivity and Perspective in Truth-Theoretic Semantics*, Oxford: Oxford University Press.
- MacFarlane, J. (2009), "Nonindexical Contextualism", *Synthese* 166, 231-50.
- (2014), *Assessment Sensitivity: Relative Truth and Its Applications*, New York: Oxford University Press.
- Rabern, B. (2013), "Monsters in Kaplan's Logic of Demonstratives", *Philosophical Studies* 164, 393-404.
- Recanati, F. (2007), *Perspectival Thought: A Plea for (Moderate) Relativism*, Oxford: Oxford University Press.
- (2018), "From Meaning to Content", in D. Ball and B. Rabern (eds.), *The Science of Meaning: Essays on the Metatheory of Natural Language Semantics*, Oxford: Oxford University Press.
- Richard, M. (2004), "Contextualism and Relativism", *Philosophical Studies* 119, 215-42.
- Schaffer, J. (2011), "Perspective in Taste Predicates and Epistemic Modals", in Egan and Weatherson (2011).
- Snyder, E. (2013), "Binding, Genericity, and Predicates of Personal Taste", *Inquiry* 56, 278-306.
- Stalnaker, R. (2014), *Context*, New York: Oxford University Press.
- Stanley, J. (2005), *Knowledge and Practical Interests*, New York: Oxford University Press.
- (2007), *Language in Context: Selected Essays*, Oxford: Clarendon Press.
- Stephenson, T. (2007), "Judge Dependence, Epistemic Modals, and Predicates of Personal Taste", *Linguistics and Philosophy* 30, 487-525.
- Yalcin, S. (2011), "Nonfactualism about Epistemic Modality", in Egan and

Weatherson (2011).

Yokoro, Y. (2016), "Butler's Distinction Defended: The Nonindexical Context-Sensitivity of 'Identity'", *Contemporary and Applied Philosophy* 8, 70-85.

横路佳幸 (2016) 「絶対か相対か：同一性と種別概念の結び付きをめぐる」, 三田哲学会 (編) 『哲学』第 137 集, 115-37 頁.

——— (2017) 「非認知主義・不定形性・もつれのほどき：分厚い語の意味論」, 『倫理学年報』第 66 集, 189-203 頁.

——— (2018a) 「認識的な種別概念論を擁護する：個別化と種別概念の把握の結び付きをめぐる」, 『科学基礎論研究』第 45 卷 1/2 号, 35-50 頁.

——— (2018b) 「「同一性」の諸相：不可識別者同一の原理をめぐる」, 日本哲学会 (編) 『哲学』第 69 号, 259-73 頁.

——— (2018c) 「同一性の相対主義の可能性と限界：意味論と存在論の観点から」, 『科学哲学』第 51 卷 1 号, 1-17 頁.